

第4学年体育科学習指導案

指導者 東温市立南吉井小学校 菊池 昌登

1 日時 平成30年6月14日(木) 第2校時 9:20~10:05

2 場所 体育館

3 単元名 目指せボール投げ名人、投温っ子!

4 単元目標

- 投の運動の楽しさや喜びに触れ、その行い方を知るとともに、合理的なフォームで遠くに投げる
ことができるようにする。(技能)
- 運動に進んで取り組み、きまりを守り誰とでも仲良く運動したり、友達の考えを認めたり、場や
用具の安全に気をつけたりすることができるようにする。(態度)
- 自己の能力に適した課題を見付け、よりよい投げ方を身に付けるための活動や競争の仕方につい
て工夫するとともに、考えたことを伝えることができるようにする。(思考・判断)

5 指導観

(1) 児童について

本学級の児童(男子16名、女子12名)は、明るく活発で、休み時間は男女を問わず元気に外遊びをして過ごしている。体育科の学習に関する意識調査アンケートでは、「体育科の授業が好きですか」の問いに対して、「好き」が17人、「やや好き」が6人と、ほとんどの児童が、肯定的な回答をした。また、「ボールを投げる運動や遊びが好きですか」の問いに対しては、「好き」が17人、「やや好き」が7人と、ボールを投げるという動作に対して抵抗がある児童は少ない。

しかし、昨年度の新体力テストのソフトボール投げの記録では、学級の男子の平均記録が14.4m、女子が12.0mであった。男子は全国平均を下回る結果で、全国平均を上回っている女子でも、遠くに投げることができる児童とそうでない児童の差が顕著に見られ、二極化している状況である。ボールを投げることに抵抗はない一方で、合理的な投球フォームが身に付いていなかったり、投げる経験が乏しかったりする児童が多いため、記録の向上につながっていないことが考えられる。

(2) 教材について

本単元は、投げる運動に焦点を当てたものである。東温市では、一昨年度から投げる動きの改善・向上をねらい、「仲間との関わり」「教材との関わり」「ICTの活用」を視点に研究を進めている。子どもの投げる能力が低下傾向にある現在、投げる運動を積極的に取り入れ、投げる能力を高めることは重要な課題である。また、小学校の低・中学年は、神経系の成長が著しく、様々な神経回路が形成されていく大切な時期であり、「各種の運動の基礎を培う時期」と言える。そのため、この時期に基礎的な投げる動きを培っておくことは、各個人の今後の投げる能力の向上において重要な意味を持つと考える。

ボールを投げる動きは、一見単純に見えるが、多くの動きが複雑に絡み合っている。それらは、腕の引きやステップによる体重移動までの動きを含む準備局面、投球方向への腕の振りおろしと水平方向への肩回転・腰回転が生じる主要局面、ボールをリリースした際に必然的に生じるフォロースルーの終末局面に細分化される。これらのポイントを意識してボールを投げたり、客観的に自己のフォームを分析したりすることは難しく、得手不得手がはっきりと表れる。しかし、ICTを活用

したり、投げる運動を楽しむことができる運動（ドリル）やゲームを工夫したりすることで、仲間と協働する場面をつくり、「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連づけて指導することができる。これらの経験を通して、仲間との関わりを深めながら自己の記録更新への挑戦ができる教材である。

（3）指導について

本単元は、「体づくり運動」と「ゲーム」、「陸上運動」の領域を複合して構成し、児童に様々な投げる経験をさせたり、合理的なフォームでボールをより遠くまで投げたりすることをねらいとしている。

まず、単元全体を通して、準備運動「とうおんタオール体操」を取り入れる。投の動きにつながる内容で、肩周りの筋肉をしっかりとはぐすとともに、全ての運動の基盤となる体幹を「ねじる・伸ばす・緩める・固める」動きを音楽に合わせて行う。

単元前半は、「体づくり運動」の「多様な動きをつくる運動」で授業を進める。投げる物や投げ方などの条件を変えた複数の運動（ドリル）に取り組みさせる中で、多様な投げる経験を積ませるとともに、投げることの楽しさを味わわせたい。

単元中盤では、「ベースボール型ゲーム」の領域で構成し、合理的なフォームでボールを投げることに焦点を当てて授業を行う。まず、「ボルトのポーズ」を構えとして全体に共通理解させた後、合理的な投球フォームを簡単な言葉「トン、トン、ビュン」とともに反復させることで習得を図る。そこで身に付けた合理的なフォームを意識させ、「スローイングベースボール」に臨ませる。このゲームはボールを遠くに投げることで得点につながるゲームであり、楽しみながらフォームの定着を図ることができる教材である。

【スローイングベースボール】

- ① 攻める側が、規定線内からできるだけ遠くにボールを投げる。
- ② 守る側は、走ってそのボールを捕りに行く。
- ③ 攻める側は、守る側がボールを捕りに行っている間に、一定の距離に置かれた玉を決められた場所に1つずつ運ぶ。
- ④ 守る側は、ボールを一人が捕り、他のメンバーはその子を囲むように、手をつないでその場に座る。
- ⑤ 守る側がボールを捕って座るまでに運んだ玉の数だけ、攻める側の得点として加点される。

単元終盤では、「走・跳の運動」の領域で投の運動を扱う。そして、これまでの学習を生かし、合理的なフォームから「より遠くにボールを投げる」ことを目標とし、各個人の課題に応じたドリル学習に取り組みさせる中で、遠投能力の向上を図りたい。終末では、グループ対抗の記録会を行い、自己の記録の伸びを実感させるとともに、仲間とともに活動する楽しさや喜びを分かち合い、成長することの楽しさを味わわせることをねらいとしている。

（4）複合領域の構成意図

本市の児童は、県や全国に比べて投げる能力が低い。投げる運動は、様々なスポーツの基盤となる動作を含んでおり、豊かなスポーツライフを実現していく上で必要な要素の一つである。そこで、それぞれの領域における投げる動きを体系的に複合し、系統立てて授業を行うことで、児童の投げる能力をより効率的・効果的に高めることができると考え、本単元を構成した。

6 単元の指導計画及び評価計画

領域		体づくり運動		ゲーム		走・跳の運動		
時		1	2	3 (本時)	4	5	6	7
指導内容	0	オリエンテーション ・ドリル学習	とうおんタオール体操					
	↓ 4 5	・レジボールスロー ・みかん袋投げ ・的当て ・用具を操作する運動 (ボールや輪、フリスビーなど)	・ドリル学習 ・投げ方を学習する①	・ドリル学習 ・投げ方を学習する② 学び合いタイム①	・ドリル学習② ・紙鉄砲 ・ビュンビュンスロー ・フラッグスイング	・ドリル学習② 学び合いタイム② ・自分の目標記録への挑戦	・ドリル学習③ ソフトボール投げ記録会	・ソフトボール投げ記録会
指導上の留意点		○ 投げる運動が得意なリーダーを中心とした、4人1組のグループを構成する。	○ ドリルを通して、様々な投げ方を体験させ、ボールを操作する動きを身に付けることができるようにする。 ○ それぞれのドリルのポイントを確認する。	○ 投球フォームを簡単な言葉「トン、トン、ビュン」とともに反復させることで、習得を図る。 ○ ICTを活用し、手本となる動きと自分の動きを比べさせたり、仲間と協力し、互いのフォームを確認し合いながら正しいフォームを身に付けさせたりするように指導する。	○ より遠くにボールを投げることをねらいとし、自分の課題に応じたドリルに取り組みさせる。 ○ グループごとに、新体力テストの記録と比較し、伸びしろをポイント化することで意欲を高める。			
評価規準		○ 投げる運動に進んで取り組もうとしている。 <関・意・態>① (観察) ○ 様々な用具を投げたり、捕ったりする動きを身に付ける。 <運>① (観察・記録)	○ 友達のよい動きを見付けたり、自分の動きに取り入れようとしたりする。 <思・判>② (観察・学習プリント) ○ 合理的なフォームでボールを投げる事ができる。 <技>② (観察・記録)	○ ボールを遠くに投げる事ができる。 <技>② (観察・記録) ○ 自分の適した課題を見付け、よりよい投げ方を身に付けるための活動を工夫している。 <思・判>① (観察・学習プリント) ○ 運動のきまりを守り、友達と声を掛け合いながら、仲良く運動しようとしている。 <関・意・態>② (観察)				

単元の評価規準

	運動・技能	運動への関心・意欲・態度	運動についての思考・判断
単 元 の 評 価 規 準	<p>① 様々な用具を相手に向かって投げたり、投げられたものを捕ったりする動きを身に付ける。</p> <p>② ボールを合理的なフォームでねらったところに投げたり、遠くに投げたりすることができる。</p>	<p>① 投げる運動に進んで取り組もうとしている。</p> <p>② 運動のきまりを守り、友達と声を掛け合いながら、仲良く運動しようとしている。</p>	<p>① 自己の能力に適した課題を見付け、よりよい投げ方を身に付けるための活動の仕方を工夫している。</p> <p>② 友達のよい動きを見付けたり、それを自分の動きに取り入れようとしたりする。</p>

7 本時の指導

(1) 目標

- 合理的なフォームからボールを投げ、得点することができる。 【技能】
- きまりを守り、友達と声を掛け合いながら、仲間と仲良く運動しようとする。 【態度】
- 自分の動きを振り返ったり、友達のよいところを見付けたりしながら、合理的なフォームについて考えることができる。 【思考・判断】

(2) 準備物

- タオル、玉入れの玉（みかん袋・レジ袋）、的、ケンステップ、コーン、学習プリント、iPad、掲示資料

(3) 展開

学習活動・□子どもの意識	時間	形態	○教師の支援 ◎評価の視点（評価方法）
1 「とうおんタオル体操」をする。 □ 肩のまわりをしっかりとほぐそう。	4	一斉	○ 体の伸びている部分、動かしている部分を意識できるように声をかける。
2 本時のめあてを確認する。	3	一斉	○ 掲示資料を活用し、視覚的にポイントを理解できるようにする。
より遠くにボールを投げて、得点をしよう。			
3 投げ方を学習する。	5	一斉	○ 合い言葉と動作を結び付けながらポイントを理解させる。
4 ドリルをする。 □ ポイントを意識して練習しよう。 ①レジボールスロー ②みかん袋投げ ③的当て	10	チーム	○ それぞれのドリルの目的を意識しながら取り組むように声を掛ける。
5 学び合いタイム。 □ 肘が上がっていないから気を付けよう。 □ 後ろに大きく体重をかけてから投げよう。	5	チーム	◎ 自分の動きを振り返ったり、友達のよいところを見付けたりしながら、合理的な投げ方について考えることができたか。 〈思考・判断〉〈観察・発言〉
6 スローイングベースボールを行う。 □ 後ろに体重をかけたり、肘を高く上げたりして、思い切りボールを遠くに投げよう。	15	チーム	◎ 合理的なフォームからボールを投げ、得点することができる。 〈技能〉〈観察〉
7 全体での振り返りをする。	3	一斉	○ 感想を発表させ、次時につなげる。

8 研究の視点

児童が、ポイントを意識してボールを投げるために、教材や授業構成は適切であったか。

【教材との関わり】

- ・ 複数領域で構成する単元構成
- ・ ねらいとする動きにつながるドリルや教具の見直し・実践
- ・ 合理的なフォームから、遠くに投げる力を高めるためのゲームの開発

【仲間との豊かな関わり】

- ・ 互いの動きを確認・向上し合う場「学び合いタイム」の工夫
- ・ 意識させるポイントの精選・工夫

【豊かな関わりを支える ICT の活用】

- ・ ICT を活用した学び合いの場の工夫